# 鷹叢書

一

ヲ多10
555
1

大晦日ニ渡ス

蔵

壱ヶ月ニ

二百四拾匁

代銀ニテ

八百文

壱ヶ月ニ

三拾匁

代銀ニテ

三拾匁文

新

壱ヶ月ニ

代銀ニテ

壱ヶ月ニ

九月朔日

明文庫
編
巻 1-5

[illegible]

# 根津流鷹之書

一 大鷹四尺ものの寸法

二 足緒の寸法

三 大緒の寸法

四 壹尺五寸ものの寸法

五 外緒結ぶ次第

六 仮緒結ぶ次第

七 たくさ緒緒板

八 鷹に水吹板

九 餌作次第

十 鷹の中の次第

十一 鷹を放す次第

十二 長命に成鷹見板

十三 白鷹の名新田殿

十四 鈴鷹見次第

十五 右の足の支

十六 ふちの中

十七 右の支

九十 ちろう生

一九 蕨生

三九 指枝寸法

五九 餅袋おろし餅さし板

七九 鳥おろし川流し

九九 網魚仕立板

一九 浮とまる鳥を使う

三九 身の重き鳥を使う

五九 焼米を使う

七九 ゆでこを流す

九九 目ワクを流す次第

十二 むちや

二九 くわ生（後ろ生のくわ次第）

四九 山とかくを寸法

六九 鷹詰取海の支

八九 栗鳥志川流し

十三 投心ゆを使う

二九 鳥まぶし鳥仕高

四九 ふせ地の次第

六九 地の中くり風茶

八九 魚茸を流す

十四 目ふくを流す次第

一四十 ちゃ原流し次第

三四十 鳥ふせ立て次第

五四十 ちゃを流す

七四十 羽ちゃ鳥の支

九四十 ちゃ流し

一五十 魚紙ふ病流し

三五十 羽魚を流す

五五十 網魚を流す

七五十 網茸を流す

九五十 きけふ病を流す

一六十 ちゃけを流す

二四十 ヤーー原ちゃ病の支

四四十 ちゃ流し

六四十 ひけちゃを流す

八四十 羽ちゃを流す

十五 羽茸を流す

二五十 血魚を流す

四五十 餅のち白魚の支

六五十 魚魚を流す

八五十 鳥物ゆを流す

十六 くるけを流す

二六十 ちかつを流す

六十三 ようつを治する方
六十五 痔ぢを治する方
六十七 大風と云病を治する方
六十九 こうせを治する方
七十一 いきりを治する方
七十三 五癪を治する方
七十五 肉のかさを治する方
七十七 反埴の寸法の次第
七十九 ちりを取る方
八十一 あさやく毒を知る方
八十三 ひしこんまいふ茶湯
八十五 接ゆくさ鷺の方
八十七 毒せきの処に茶湯
八十九 上羽ぢを治する方
九十一 あ毒接ぶ取る方
九十三 菓毒仕る方
九十五 當流の取おすすめの方
九十七 鶏のあけ木仕る方
九十九 鶏の切取る寸法
百一 物を腐を治する方
百三 魚の目を治する方
百五 面眼を洗する方
六十四 樽のぬけるを治する方
六十六 ろくを成るを治する方
六十八 こん風を治する方
七十 血をとめを治する方
七十二 血のめけるを治する方
七十四 無茶合次第
七十六 ちこ肉の出を治する方
七十八 毒に角のの方
八十 ふうやく毒を去る方
八十二 毒に強相の方
八十四 たとえ毒を治する方
八十六 骨鉾取る方
八十八 組茶の方
九十 沖縄の方
九十二 七種の深茶之方
九十四 鶏の組魚仕る方
九十六 鶏の取茶寸方
九十八 鶏の捉心取る方
百 紅の毒ふ茶の方
百二 息茶治する方
百四 諸病の対毒を見る方
百六 けうと云病の方

七百 矢支と云ふ鷹す支

九百 ちゝふ鷹の支

十百 集二鷹捲ふ〻す支

十一百 友鷹あひのこと云す支

十三百 鷹の毛すり物の支

十五百 鷹の毛すり物の支

八百 鷹の餌の分ら支

十百 ゆもうと云病の支

十二百 毛と苅物の支

十四百 鷹九きひっと云茶支

十六百 らんもつしたる茶の支

十 大鷹のむちすりすたこ二尺七寸又兄鷹もふち
の寸法弐尺あすこ山ゐらいを尺八寸すこ

二 大鷹の足緒いしすぐふくしあわひ九ふしあく
〻おもてもの足緒先きとうこ二ッ一ッこ有説

大鷹のいを七寸弐ふと云こ〻りを兄鷹
の足緒七寸弐ふこ有説 六寸弐ふこ〻もこ

但鷹のこ〻おりかこう必有あるべし

三 大鷹の大緒六尺あすこ兄鷹いあ あすあり
ひこのをこ〻こ〻

大鷹の始ちの寸法

長屋架さを長さ次第架の本いかゝる檜
ふとさ六寸七分こしはこの立木の長あ八寸
こし架の角ゝ四寸式分こし架の高さ地さから
三尺八寸こし架の横木を指わてぬいこるむす
いあいとぬすべは何しも苦しかる長屋
ゝ中長こし架さあのつゝ公方の架ゝは
あゝ法を長しゝ小さ式寸のい
ぬのとあさゝ小家の仕を長しゝ小分る遊
板ゝもぬいさるゝ小馬屋を三寸
懸てさゝゝ小さゝ法こし仕つるゝ板こ
口傳分架さあを分る板い高さこのつぼの

こゝ小ゝ小ゝをあゝらて横木小こゝあ
の板の内をゝ小ゝらて白洗かゝ分ゝ長
架さを式次第長氏又兄弟大弟二姉
祭ゝ架の寸法本石七尺あすこ兄弟を
なゝ木ゝ小ゝ小ゝ大弟い兄弟の方
かゝあんとるゝ小ゝ木を長ゝさるゝ小
こゝて此紙をあゝ小こゝてゝゝ
とかゝを此式ゝの弟の中ゝ小夫人弟者
先式弟ゝつゝかゝゝの内ゝ夫人の弟
とゝ何ゝゝゝてゝゝを長るゝ先代のおゝ
の故こさるゝ小こゝ式ゝ弟を先祭ゝ此紙

鳶の繁きてのおもしろ〳〵かの鳶の尾
鷹なんどうつり鳶なんどの文鳶（カ）鳶のもの〳〵こゝろう
くさうて繁を引張てをさしこんでいまゝ〳〵
なるかゝるのくさうふしのつゝみ大鳶七く
さう又鳶いかつさうこと法やゝ〳〵
外繁結尾を次第に次第に結こゝ末
の方六尺あまりし繁のなかの日すく繁の
高サ拾尺拾寸とゝふるもあるといへども鳶
通のちかあてかひて結をあたゝとも
鳶を日の出する間こうり見の時を鳶の
歌かあると吹繁うるすいに式いたる日あるう

高眼尾羽毒生とゝふる式い鳶の繁きこゝ
うきかうつてかぶる朝日繁を出
生の出るゝとしたあるゝ風ふるの日い繁
くあるうゝ次面いさゝあるゝ小いつを
も根生ふうゝ次ふくいあつあるゝ繁
の本秋うあこ面いかわ本をたた
矢いかふゝ次根の繁を面ゝくあゝ
二段の尾後あいは鳶通のおつとゝ



かう繁いあるいい通ふかをあゝ鳶通の尾を
むるる繁く繁ゝ繁ゝあるいかゝゝ
のあるあいうつて見ゝを繁ゝゝ入る本

あしのうへいす法にるゝ小おうしもあ〻者
通の見はものうて結と才法とたこと時
主末の筆りを切しも繁〻拍いこと
さうてとゝ下へ大弦と引通さぐ合と繁
といてう解衣のうへ小大あとうとあいあと
せとと解ようちかけて繁〻又むうしさ
と一才かけて繁〻こと結むうしこのか
のオ弧表じてとうし

七

たくこと解ようしうのふとを才文あと
おて解と結よおうしたくせつあこうる
繁〻ゑうのうちのこうかかいとあ

八

ゝ弧を才こうう垂きてもくてもるゝ大
弦引とをてこくさうりさうて一もち
引とおしてこ筆をうしうちめのか
うゝ小繁〻解の次小才大ういかしこ
奮小ゑ吹拍口をいうふももこと先部
小次こと月くいをてくゝふくこてえこ
のかゝ先きうう稽のとまて吹又花りの
かゝ前きうう小ものうゝ吹法拍二口に
定む但奮主の始ゝ吹うて吹うこ
幾度ゑ吹こてもうしふうて吹うこ

九

解小る拍おゝざいう解ここし作拍

しほかけて餅ゑにこるを屠又こざいてい餅
いこをしほをふつとうかけて餅ゑにこるを
屠しを屠又柳餅餅い柳の芽を呂ふ餅と
又ちう餅いふふもこまつふかしもを作り
能く洗てほくる屠又ほくる餅と云いう
小豆大をほくよりて胡桃の梅山椒ユ
又ちつと餅と云いうつこのあ一ワこ
ぐて餅ふるいかけてかくをめを
かけるこふも屠又たちこを色この志
不てをまゆて作る肉の引けるを屠ふ
かくこ又もし餅とはうもまさめふ

作りてかゆの湯少くゆの碧ゑ松むを式
餅ゑ久爰投ふるさ屠志ふる餅こ白
の百かふ屠しさ餅のるも樽の花を
呂ふて作ゑ餅こ去地屠志人の屠よ
かし餅こ又だんご餅大をしふ作りて
こまかふをしまるめてこ年屠よる
古酒ゑ作ちをさこ日うう内の胡桃の
内ちのこめりてふかゆをんをるよ此
餅を口ゑふりて却こを湯をもくい式
てちをほうをゑ餅うゆい血をほくるも
ふしを屠る餅の作る作作当流十二板首

と云へるかんやどりをこゝにかいたるもの

十

鶯の生の次第をかくと見るなり不可也

あり一ゝ毛羽もまつ白〳〵こゝは羽ふく

まん白こゝは眼の色白〳〵目のまわり

皇毛白〳〵めかんさしかへ鶯の足ハ

似うり足をかいつ〳〵かんさしを六ゝ仙

の姿なり〳〵七ハ世間の色白〳〵是成

七ハの白をいろうの中ハ皇毛白ハ

第の羽ハかうきもの皇毛成もを

ともを羽ハ白〳〵をふとゝもるを思ハ

生の白をいかゝ

十一

鶯の相成見る次第をかいたる鶯の

目のまへ通く尾羽をかいたるとゝ

是成羽〳〵もの鶯をふまもるをこゝへ

ほうく〳〵あうくうの生をこ

ゝ次ハ〳〵をかいたる尾の生をこ

羽第をこゝ此鶯を言相の鶯をこゝ梅

生〳〵をいへるを書中ハ叶ハ又ハ第

形〳〵もるをいへるをちうい目〳〵見

ゝ鶯をこゝ又あ〳〵をこゝ相の鶯ハ目のまへ

の人ゝ第をこゝハ尾羽〳〵羽をゝ

[illegible]

十五 [illegible]

十六 赤鳥見る板せんあり赤しして泉こけ
[illegible]

十七 鳴虫の文脇いろ白してふもうて
[illegible]

十八 [illegible]
[illegible]

るをもつて人をおそれ
十九 千壽草 解毒 この根を掘て壽と云
横生 黒く切て煎じ一日に五日のふる
まし命をのべ仙人草
十八 むら壽草 ふるかゝりて死
ふの身 黒ぬれ むら壽と云 武壽 高壽
ゝをつつ
十一 ゆくあ草 くあ 黒 考 ゆ
白 黒 蕨草 ゆ
十二 今 ひけ 云 ふ 壽 ふ 小 ます
ましく命 ゆ つ ゆ 壽 武

の身 ます 足 ふ
別 黒 ある 武 草
十三 かり 枝 ます 大 ゆ 考 ゆ 黒
の 高 あ ゆ 考 る 又 武 身 ゆ
あ が し 切 壽 通 乳 あ ゆ
る ゆ 木 梅 木 木 百 濟 國
ゝ 壽 手 海 時 毒 ゆ ゆ 分
海 小 國 王 ゝ 小 考 小 あ ん
ゝ て 梅 木 ゆ 草 木 国 草 木 る
法 の ゆ

十四 山 か 高 次 井 高 三 通 ゆ が い ゆ

下ふ只一ツむもぶまゝしのむを式九
とのるあすし結式めめの第ノこワぶせし
切板ゝゝ切ゝゝてゝゝゝうウカめ
とあつる一説おんる孔めすがゝると
ふせつあり略四すし結式めの第ノ二ワ
ふせゝゝ去こ月ゝゝ海ふかゝる
オ法おゝしゝ切し

八五 餅袋小おゝ餅をゝ孔をゝ支あゝ尾の
ゝ孔ゝあてゝ海ふ小ふ孔あゝ去月
おゝるゝ叶ふ尾ゝゝ

八六 雛膳清取海しのゝ支ゝを附ゝまゝ
ふゝ海をゝゝゝて海ふゝ海ふゝとゝ
をこゝ尾月ゝ膳をゝ海ふ支取て引ゝ
このゝゝ一礼あるゝゝ
礼ふふゝゝゝて膳をゝゝゝ双
オのふゝゝ清取てのゝ時引ゝて
膳をゝゝ立る板こゝ尾ゝ孔ふ月ゝ
月のゝゝ小式支をゝゝゝ一度ふい
此ゝゝ口餅ゝるゝ孔ゝゝゝ尾を
かゝ祝て祝ふまゝゝゝゝめゝる
とゝあて海ふゝゝゝ神ゝおゝゝゝ所
をんゝゝ見ゝ大ゝいゝ小の膳ゝ仕立ゝ

の方と年いやしくし給ふまへおくがゆ
蔕通ふうこゝろもて至るあるへかりし又蔕
大蔕四人鶏鶏孵うふ多くし給ふまへ
ておくとおもふ

六八 巣蔕仕立て抜おさるる後に竜かし角
ふゆ尾のはこゝはおしてあるとと
以こゝあらけさる巣結とさた又いうゆる尾
いうるるゆとと竜の内解よ結て生ふる
尾四ふの以て竜くるおし解ふ四日ゆ
解てゆくとこうゆこゝ後ふつうるこぶ
ゆてさいくゆ四解とこうゆさし張米とする

ゆ説ふと蔕ゆ陽とあひもるゆこゝ後と
以へふゆ出こゝ後と心ゆい巣蔕お六角又
ふ連て道ゆふ多ゆふるあゆてふ
あゆとあひもる又毋ふはふ尾四のちぐけ
多ふ後のぐふて人ふゆふこふ以四尾
ちぐけるようふて張米やぐるまへ一後ふ
うふふして後ふいうゆふ後ふふいゆ
陽とへふてあひもふふ陽うゆ日ふ
水とあひやふあひぐはふふふふ
て外解ゆ解くゆ肉とふらへふ氣
用尾ふ巣蔕の九心出ふる時ゆ方ゆ

のうこうとも為かはおもしろやる見れば
うさぎと心得て言葉の日を暮しを捉
用いまゝ高麗のこさるを不審ようたと
おもう又高麗の見きるかもうう心をる
薬為為の生血をうへてふつの病
ひとうあつをつ服よ病なるもこつる
うゝ風ゝ云病つゝかゝゝ為の生血
毒こ為をさまして捉用ゝ

十九

あつけ為仕ゝ次第あ不ゝの一つあ
為を湯ゆて洗板あつ二ゝ竹の架つふ
ゝてゝ人の出入の頃成及せ急きてこうをゝ
時為のゆゝ後水を吹て繋くさもく
して為ゆるふこゝ時央をかゆへこゆい不
もうまゝ屏成ふゆこゝ行ゝゝ為あ
ゝてよゝゝへゝつこあ央ゝあて回屏ゝい
て為見ゝふは又ゝ為のゝしてゝふゝ
架いゝゆま井ゝ為ゝけ形ゝ出いて為ゝ
ゝゝあゝ架ゆゝゝゝら板よゝへし
かゝゝあ夜ゆあゝゝゝ成ゝてゝ後い
ゆゝこゝ祝の時ゝ捉ふゝて捉架
繋きて行る屋ゝさい和の時分ゝ月の時
のおゝうゝし捉て一時ゆ休ゝゝ後為

うえん強い一日拵し為るつゝ可しそれ
拵所要こゝかゝんこゝるあとに仕り
餅かゝんたゝくまき口餅ゆくゝ可つく
こゝやこゝきへかゝらて沖縄をこゝ度
ゆし沖ゝこゝ海ふくゝ外よし沖ゝ遠く
おくこゝ者ゝ度ゝ網恵い為ごゝゝ恵い
えゝゝ大ゝい志ゝいゝゝきの込けそるを
つゝ拵ふゝ位山籠ゝ心ふゝい志ゝを引し
こゝふゝせしたゝこゝふゝ可あゝ可あゝよ
為あゝゝしゝまゝ行ゝさるゝいゝゆゝ
ゆゝゝゝゝるゝこゝゆふゝせゝ度ゝゝゝる

度のゝゝゆふあふのけゝ重きゆり茶
ゝゝゝゝ為こゝる迄ゝ餅ゝゆり茶
ゝゝの根をゝゆゝゝゆゝ第一ふゝを
日の中ゝこゝ度ゆ同茶い為ゝるくゝゝ
ゝゝゝゝゝこふゝゝるゝゝゝゝゝ口餅
ゆゝゝ仕ゝゝ文ゆ初ゝゝ根ゝ餅まゝて
ゆゝて仕ゝゝい餅ゝゝゝゝゝゝ為仕餅
のゝゆゝ一ゝゝゝゝゝゝゝ二ゝ大ゝこゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ志ゝゝて餅ゝ食ゝを外の為いこの
餅のゝゝゆゝゝゝて餅ゝゆゝ為拵ゝて
仕ゝゝ拵夜拵ゝゝゝゝ焼ゆゝゝゝる

小ちうて皇帝出き必ず帝小網帝
ほるゝ又者ふもむりて帝ゝへるゝ
むゝうゝ歩拾ゝ仕ゝゝゝゝ
當時ゝ夜拾せゝしてゝゝる板巳
者まゝ網帝の能ゝよいこのやゝ小者
一ゝ又をおゝる網帝一ゝ皇帝いてゝゝ
かの方つ帝網へ入り網帝ゝ一ゝるゝ
海をゝいゝゝ者ほゝをゝさゝゝて網帝
ゝる網帝の次第ゝ者ゝ之ゝるを
拾心ゝゝを仕ゝゝ次第ゝ変拾ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ほるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
沖ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
網へゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
小俊拾ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てこのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
拾ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

りてかくのごとくなるべしとすれども
なほ又考るに又なるべしいまだ
繰き考へとかくしふかあけて又考るに
某のこと
是もその所 こと色青少間ふ此某間て坂
かもそこなるべしなほ遠き者ゆゑ
合を坂に撰こと考へさるべしかの
こと多くていまだ本間のかくこと者あと
やん打命治薬を一日かくべしこれよ
こともこの病おかしく毎遠の者の弟
歴とこんもの(こと者の自然命失ど
ずいとくとも者のこと考へ赤しして茂
なるまこと中根おこらんれ必ことに只
かもこと考へかいかの仕方用ゆる所
毒こと考へるに根の病を必ずこと
見ふこして中毒ス支治ことなる者
根こなる者を抜出ス支治ことなる者
こ而こ色のかの一こ種のこと者かくの
ここ二ゆ細くすこと者の内自然
者のあふこと者のこ牙をとりくこのてこと
やこなりもこと者毒生ヤこと
小こりて見こ一こ牙のおりこ者の

茶の湯かんこころの神と一夜白あつ
記てゞかけて二人茶のかゝりの花
なぢやくふかゝ
茶ふまふ茶とは拍子次第こしやまふ
ふこせあり一説茶くせ五ゝ又と
ゝ拍子する茶唐頃の拳をせう
めて茶二説病ゝする茶を見
しらを拍ふふゝとて此らくせこし
茶唐ゝあの肉ゝ記ていゆゝ
ゝ拳まして茶ゝかゝを茶ゝ
て功ゝ拍ひまをゝゝ茶





唐のこゝろの黒焼　ぐゝの四の黒焼
ふを加ゝの以の黒焼
ゝ茶を仕ん百年ゝ
一ゝい海ゝ色てもやゝふこふし
牙のあゝ茶をかゝもる次第いゝ
い唐のゝゝ
ゝあゝをゝ
ふせをこの次第十二段ありゝ
茶ゝ五段ゝ
ひふせこゝゝふせ

ふせたごとくふせかくのごとく
ふせる者道の如くふかくこころ初心いたし
此内をわとる者をありてふせるうたく
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ次第本の製来と云い
一あいうこゝふをゝ（かゝこゝこゝうこゝ
とこゝわ又急はかさ祈ゝ物りてゆて祈り
りけてゝゝ祈待と祈つゝ一度ゝ
ゝゝゝゝゝゝつゝてゝるゝゝ本の製来と
云こゝの名をこゝこゝかゝゝゝゝゝゝゝと云
い祈をおまつゝゝりけてのち祈物を
祈おをゝこゝかゝゝゝゝゝゝふ



ゝゝの者ふをゝかゝゝ祈板の文者所
のゝゝ切こかゝ製ゝふをゝこゝ角
を祈持をゝるゝ祈文のゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ者ゝゝ製来の次第こゝこゝかゝゝ
角屋の屋羽おゝ者の次第ゝ乳のゝ祈
の中ゝゝゝゝゝこゝゝ竜の所ゝゝ
おゝゝ合こゝ地の内こゝ七日かゝ時祈あり
一ゝゝゝめの羽又い祈分の為所ゝ七日又
大ゝい為所ゝ七日こゝの羽こゝ羽ゝ時ゝ
七ゝこゝ七日ゝ屋ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おゝゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かるもの多く毒の茶少て毒
の冷く少てあるなり屋のうち出て
ゆつらふふ此茶くしかさうくうし或
出て尾羽も甲乙なくしてあるあり
ちくちくあけくあるなり四七うく
しておるうりかるし毒の根中式分た
ちて夕暮をあつせ茶ことろふ
口をけくこ赤のもこてゼさる花い解
をくふる時に解の甘毒くなるめる
農中多あしてこの茶を引てちん
をるこ茶のうりの味の茶毒のまた



方ゆや見を思ひ物ひ一てこ上る日ひ一
変ひ解ふ解ひ式毒のうり毒ある者を
ちちこ酒多のこいて當夜ひちん
しぬ中ひ人ちる出毒ひくこ
皇茸を治せつる茸のこゼさ
ひ時は細く瓜くく皇ひ七まてこく
ちひくちち茸の根ひて毒つくる
ちう茸のくくひるあれ出ちる毒を
農中ちうちくくひ茶毒を茸ひ茸
ひくこ人ちる茶毒の茸のうち
毛獅を加ひるを屋ちて赤ちりこゼし

もあたんしもこぶあやく又出いつるときに
一方鹿くさ茶の事ハ七月十日ニ取てよる
煙の黒焼にしたるを八月頃取てよき
て鼻に入れ此虫のある洗場が飯にて尺
同くしき病の事猫を飯にてかさこて
むりん西方のかしこ前きよ当しめとまうつ
ふも茶の事　鷺の羽の黒焼　太きの粉
黄柏の粉黒焼ぶに合て此茶ふりん
まづへ小いふかとさぶかりん取て吹て三度
此茶藤しかく七日日ニ一度鹿服にかく
又天南星のとき夜水をめ小吹て度に

卅九

搔しく多小い皆呼して小志るまそく

四十

同中くを治せへきこと事めハ目のうらい
らん肉をい出こうじてハ眼つふるとて茶ハ
こその中れ及粉とき飯を加てく吹又
おい出するこまの同蕎麦を見てかけかし
るるを屁さあおしあてこしかいの事か
ミを加ましてー方のこるめる足もとえ
まさる夜度に於猿き専要く

四十一

鼻小しるの入るを治る事ふるの
天合乳をとろ小付て朝日にあてうれく
此乳汁の白きをかきて鼻ゟ出たるを鷹を

ふせ汁を出してかけてとるとしてとろろつ
やはるるに入れて又とし猫を焼ふふ
ようつゐるうんてを必ずるうてかりるとこ
ろけて胡椒の粉をこちん沢加てとろた
るどとろてかとろく鼻小孔ふ入れ

二 四十

せとろ云病かまち眼まし猫ちんの
水かふとあるとろ眼ゆるかまちゆゆ
ぬるとろ先きとろうて血と泉と行事
とた膜ようる起病るふとあとろふ
原たしし

三 四十

薯小汁とする事一ま鼻集二傷のふ
ふふとこよりあるとろ小のんとろうあつる
とろのていつはしふ小行た

四 四十

こせとふ病の事とろめいちとやとろ
ゆはるめけしとろまとふいかまちふ小首まふ
まとろ一杯とるるめけてとろ後ろまとたく
まて扱とるまてしのちあいちんゆ水かふとあ
ふとろまつあるとてふとろの事ゆ中ん
かんとこあるて薯とおしふせこの此薬し
陽とく洗ておるとくとろ病の末と力ふして
このとろけるるふ病薯のしまざる夜か
てとゆはとふつるとゆうとあてあとふ

の出汁と丹紙と四方を引ふるあしてあ
ひたあしらけるあてこと上成
あらしの出たんかてぬるめ分つき茶の
事一ニ天南星 二ニ記で こ中
ヲ成記で中ひの冷て出そげるひよ
ものの四て分ち日ニ一ふ成つあこる分一
出病の分事ハたやんかまらしらる血
のたびたるを出たして出病
ちるこしを類うおこるあしく出
をちしひやをこせて出肉の
るひうの色の中を塩ふこ分し塩を

四十五

ふるを魚ひの器ひしひたる
ちこ成目ひをつしいひとえて
遠ものをこつあるるものえつあ
成出ちいひをこ能をふく茶い
人る目茶成ひしひ吹く

四十六

成つきるを治をる事ちこやしの目
のしをこをちの色をて目魚所ハ成
中のいこかしるを湯の出汁く
こ出ひあしこて茶ハ加中 人参
ふ成ひつ七日間 又 を加ふん
ふんあるる 海中ひ

うち胸のかしらづくらくあへ丹はなきこと之
ときも秋のうち気はそし去二夜は白ゑ有月に
当りてあつく餌らぬとき成る事から
羽かきの膏を治せる中はきめたる石を焼
こまかにせきらせし がけ 中まことのそこ度
しやせん草 かしまの萩の葉 見成麦 水
をとくし此臭しらくしむし サいちぐい
する所を押虫してつらもろとほうまき
を夜き見成るふさき餌まぜ少崩来てかふ
度さに菜の臭文 一にさし志の 二に天瓜粉
三に湯柳 四に甲しこ浅 五に鍋の黒焼



たゞ志おけのうぐの黒やき 見るをあそうこに合
て七日餌にへし文かきせる所に甲柳は成
せくして胡の中夜をかきはませて かさ
るる所を一夜ほく七日つくる羽かの膏
をとりて宝に血く事は葉求まつかく
あるいは上へくも風のあそうせるは虫かし
羽こそは胡ふし 徳て蛸かしぬ羽ぬけるく
てさとくはく血の付てぬくるを跡より羽
柳かるとへくも治して切しあかしては
大ろの梅といふとるもまつ血をと取て後
天南星に しやう陸の黒やき 志んの水

九四十

かの稚子羽の穴へ入てのまを羽ちき後
小あつりて此茶をとめる羽ちき後ゆ
てさ〳〵入きゝ一日迄てゝる

羽くさ治せへ事一羽のつゝめのゝくへ
きてゝ色ぬけて跡ふしく茶少い
天南星　小さゝ　硫黄をかゝへ
てゝうき飛くゝ鳥の羽ゆくゝ分へ

十五

羽留り治せへ事毎い後羽の穴へふ
さゝ切ゝて羽の計ゆくゝ羽ちきはをみ
ちを噛りて茶の支二説あり也へゝ
一説ゝ二十日ゝ内のふるの大ゝくを

かけ用ゝ　夜のかいこの種きへのあゆ後
ゝを入合こゆきへい茶いゝ桜の羽ちき後
ゝる切ゝ後ゝ後ゝ切ゝて羽ちき後
くゝ切ゝ小出ゝまるゆくゝ山茶ゝ茶へ日
ゆりてさゝきへゝ切ゝ事羽のきゝこゝ
切ゝゝ茶ゝ長ゝ切ゝ日桜ゝ内ゝ書後
ゆくゝゆあり茶へゝ色ゝ日桜の事すゝ
ゝ色きてゆくゝ羽ゝ藤治せる時命
あゝ内月七月ゝ小ゝ色出せへゝゝゝ
きゝ二ゝ三年羽の穴ゝふきゝて出へ
ゝ茶ゝ尾羽ゝ羽の計の

必ずあるべし此方へ水茎成ゆてきせて人
まゝ水底とやるゝこゝ八角合こ角を六
さらを対所ゆゝ様て羽のめくむを也
同表中の百面小黄ゝと茶ゝなるゝ

一五十 ゆるゝこゝ云病を治する事ゆるゝい尾羽
まゝ成ゆけてゝ変ゆふるゝ加まゝ
別ゆゝ為大事の病こ茶い

めもと古酒ゝ黒ゆゝこゝ山白
ふ〳〵此病の分ゝ面象の方せん羽ふ
しふあゝこゝて書の羽の穴ゝ方ゝ方を
て羽の加〳〵水ゝて為こゝ也を時ゝ

加〳〵表中の百併い伝こ

二五十 血色を治する事書の牙の内合一二ゝ
内こゝ血を食為ス茶の子 天南星
こて加〳〵同ゝ成様ゝ合て檜を羽
こゝ方ゝて此茶ゝめゝ方へ水ゝ式
計をゝゝある羽の方ゝいをかゝゝて

三五十 此薬を羽のぞい〳〵ゝ色いゝゝゝる羽へ色
こゝて時ふゝこゝ羽心水ゝ此病の
分ゝい面風水あて内水繰きつ
めゝる書加〳〵のゝゝ也ゝて
羽色を治する事牙のゝを一二ゝ也

て喰おしく氏卵くさへ血出の薬を以称
ひ入てころもも搦ある卵くさへ薬を入て
ちむし卵虫か痛くてへしも病生目傷て
五十四 餅の害悪の事　雀　鶉　鴨　あるしく
云花　ほくに　田志しも出東は餅に
悪麦餅の事　ひよる　ふして　ひたさ
のそし山もを　ある鶏　但　水鶏いるさ
餅ともへしも中風痛の一薬也　吉悪
云極ほとに　出所は益さるかよさ志さば
五十五 胡桑を治する事　炙酒るいつほし
しふ志ある薬の事

いろつくおちきる小の去をも日の内にゆくり
あるを　虎猿　里玉の黒焼　あるかかる
の黒やき　人参　かんぞう　薬師草
志ゆ志や　ふし海角　あけびの実十に
ふ田のゑをとりて日に当おしろいの
こしにねきするを丸め餅し胡桑の薬
に穐冬ともへしも此打冊し但此虫出
と痛ちど人あへい薬せんなし出るを
らなせぬを虫生のあそうし胡桑の人傷
かくのこし無る餅をかきしほうりして
胡桃ほか分し胴桑おこるかかるかを臭

気に咽気ふさがり咽気に二つの経
ありおもによつて起る咽気あり又鼻
気の是つ気咽へ入りて肺気となる又
こころさ餅をのみてうゑを突きさされ
して咽気となるなり気より咽気の
起るは咽気おば先さし血を鼻気を
衷出来ずし咽気をはれて出ること
五十六
鼻気を治する事まるしき時は薬
おなじくは気にしたるをまつりは気に
薬少しあらまち痰ちんまるくべ候語
つまりつまりさる内に衷出てし鼻気

痰はあらくしてあし痰のこともくに
ところ足は鼻の穴をしふさかりさるに
よりて是はまりてこそ招くことあるべし
かれ薬の事　人参　かんぞう　丁子
桂心　沉香　芥の根　かうびる黒焼細
の論少し薬しうりすし鼻へさし痰
をふせてみを噛り口の内の鼻の穴へ噛き
さとるまし此薬をさし衷出の為洗餅
胸にも衷生の事いとうすけ鼻を取れ
取れ痰の出に多ふさ疫にねむく行要
く絆くきをる衷の風の有夜はあしく

七十五

ものあつきもの、する夜眠を用ゐ
鋼草を治をつかさ事鋼草に連これをする
血を吐く七度出るをふうつてあるに
いたるを過をつてゐるをかいかるく
ときどきに出るを拾ひとゝもに臭あり
茶い鋼草用ゆるに効ふかさ
薬のわとゝてわふを治をへき事ふ

八十五

ゝ一ゝ病ゆしわふ薬あり二ゝ神のこゝろあ
ゆしわふ薬あり病ゆしわふ薬鋼揚
ゝゝゝゝも肉引さゝ神のこゝろあゆしわふ
薬いまへいたゝやもいたゝふ時はむらて

九十五

さむ浪肉揚ゝゝ出血浪とゝんゝゝてあせ
をへゝ病ゆしわふゝ病を治をゝゝ必わふ
をもつまり神のゝゝあの薬い檀をつさあり
ゝをゝ変き度いゝゝゝとさげ薬をさせい
とゆ茶ゆゝさゝいゝゝ　せん乳を陽
ゝて解を洗ゝて用ふく
をけゝゝふ病ゝゝ病ゝゝ薬通のあり
けゝさふゝゝて出病ゝゝくゝゝをつゝん
ゝをゝ舟参をゝこかせはゝくゝゝかゝゝつ
ゝ所ゝてあげゝゝけつのゝいまし薬の
ゝゝ嬢まゝてゝ所ゝをふゝゝ分ゝ出病

生薑をすりかしら灸のつぼ穴あつの所方
のそこふかきを灸てこれをいとはしさて灸をし
ゆ穴をつる又指をりつてぞこをこまさて灸
せんの前に胡麻の油をもつてあつて大豆い
一寸ほどもあるをあぶりこをもるゆを
いくとも一度二度ならはかりにあつふ油を
ぬるをいとはかりまつそるをもつて出あぶり
ゆしをるをもを解うに様の茶さい角（大豆ノ如ク）ゆを
ぬ湯出ゆ用ふるに刻の水を出用
をけをふ病をもるを絞をあ
て尾を引けるやつまりを稼をもつ次ら

十六

つふけて尾を引けるを石水鶏（ヒキガエル）のこと
こ絞をあけるこをほんをもる時こをほら
をしてあつをる人のあをもをを要をもるを
ゐるをけこを病を治をもの事此病分を又
蟇どこをる解を用ふ酒解ゆをこをいをる
蟇此病分に茶い蟇の出き血崩の出き血解よ
あへて用又鳴のあふこをを用ちこを茶し
て穴ゝを細く洗こ

一六十

こをけこを病治をもこをこをを古き解
をこをこをあつ絞く穴のこをこを草（キノコ）のこをを
ふあ揚い出をこをを用こるを灸出汁ゆを

只一度あてもむる擣搗するとおろし搗茶を
四さじ二ツ位くに日に一度を用ゆべし
ほくとを用ゆべし他うつ

二 六十

うかつとを治すつぎ次第 穆のうへ猶
こまぎれは腸を治す奥の器法師に考るとと
ゆくに穆の上の中のくの用中のいとを七夫
あてめて茶いれ水こと 事前考と奥
して日に一度ほし洗ふ表出の百たこの
ゆに茶をくむ事なり

三 六十

うつうつと治をつるとうつうつとふ病い
めうつうを取るとと猶ほうつ

してこれ水かしの内茶の方 こまめ
沢蟹 硫黄を成れ水に合ちめ二七日こと
包元日二度かに日に茶しおかしも元茶
しうちまし中でる茶いつたとゆくも
沢蟹行要し

四 六十

腸のめけるを考いうれ水に尾こうるる解
茶き細いむもをもうて血をとる様器法師に
ちうた日奥治を穆の根又
よ奥れのつぎは器法師に治をあるのあん
思い麻の茶を変てもて又解をとる麻の茶
少と煮て茶あるる解も麻かのふとこ

と結し繰り返すべし

膏の餘あと行要してもるべし

六十五

しらの抜しまるを治する解脉ふ四ごら

とるべき支膏のしら抜をするようて氏こ

ばるもしらとさつせ事とる法師べ

まるきしらとるべしらも白しあるて後さ

表生こかるひかるべ茶の事い梨と陽

まして十日を限又あるべの及まざる内の

さ稀小ちるべ分きさるとかけてこ解小

婦つかけ十日限こ及てるを血と時べ解し

まつらとるべ表生きるりはたらま

六十六

ちらんもるるすあるべ

膏のうしまをるべ表あり此病の分るす

二法あり一に表解をとるを表解

しらかたまりて梨まるるようてこ又一に

胴梨の血をるもして血ごうて胴梨の

血四こ梨梨しるもるる紅一をちこ

をしらかるべ大るかるを

しもかまりて法けて表生かるかる

しもまるある病こ茶の支

人参かんるる茶師なるかを赤こ

合かんるやしを刻こてり加解を包七

日頃は此病は肉をくりくくもうれをとめつく
ふゆをむ此病の後くるの薬のしらの志と
まゐらするふらかしのごとし
六十七 大腸と云病は沖風の後様くふかくしふるし
ふしなかくふるしをむかれとふるはのことし早し
うとけり能く病と反表こりふあるしもるを
専ら此病は灸を行要にまて灸孔は馬陰師に
去る内薬の事は西若の黒焼を椙茶よ
まそく文素の本を湯よりてふらつしかり候に
六十八 しし風と云病は猫の肉と後しの君彦ふく
小わりて肉にあ後くまるふ狭し寝大きくくる也
ふくれかぶりたし猪のけの足には藤原たりれ
とじ必ずる拵へなく藤原の事は胆の汁にて
つを後茶くめこそる麻の法を待し茶を
串柿の三尖の黒やき黄檗の粉まへん乃
あかして足ぶ胡麻の油にまぜて此法よ此茶
をめりて猪肉のるの尻ふくふくわりかくる
中へをそひし通し此薬の法肉の尻まで
まう様よをる行要く胆の汁少し水をとる
事なし
六十九 小風と云病はなしくてうくらうかゑ人の疵
熱の如くなる物出来て薬は黄檗に硫黄

加へて日々かゝるとまやせし者とふやせし式
ちゝ〳〵の茶を分し酒の汁かゝ血を取れ
行ゆくし此病なあゝはけるゝ拾ひこゝろ
足ゆくしめしを引るようてゝの血さらん
をるゝ表生せしぐ出るかゝしまゝ
黄柏を黄して苦る洗ふ〳〵反あたに
解い記ゆをを要しまるゝ
血をゝゝふゝ事あゝ茶は茶師茶
をゝ〳〵天南星人参かんゝ呂武彩
メ日ゝ二度ゝ七日飲ゝ小酒解てゝひ
をる者此病ゝゝ



いゝをゝいゝ をつてゝる出をゝ〳〵ゝ
てかけ瓜の汁ゝ切ゝゝ表生せしはかけ
瓜の汁のをゝ切ゝてかけ瓜をゝゝ
ゝ〳〵ゝ拾かゝめを此いゝ小病あゝ
足ゆのゝゝをゝうて切ゝあゝ者をふ
せゝをゝ小めゝ〳〵かゝ紅るゝ屋ゝゝ
一ゆあゝめゝゝゝ小ゝゝる茶のゝあゝ
いゝゝのゝゝの黒焼 女の髪のあゝ能よ
のゝの跡のあゝ元ゝあゝい猪の油を加て胡
麻の油ゝゝて切ゝめゝ表生ゝん表を分し仕表
ゝゝ〳〵るい者ゝゝ〳〵たゝん者をゝかし

いかほとなる薬法をさしく
七十二
虱のわけあるを煉茶を猫のやうにくるゝ鷹を
てうしらせしして煉く附薬の事
此虫のくら焼 かまの口の黒やき 升の
法黒やき又胡麻の油にときて日ゝに二三度
十五日付へくべきや出かい虱出しく拵ふゆゑ
苦しかるへき虫の汁をぬるへし
七十三
くちの気の茶の事二夜かしのこあの茶
ふくし鯛を請ふ文るかゝきうる夜気
たまゆくしと志うとあてもるとなとん
七十四
鷹の薬茶合事 人参 かくな
茶師のおな。茯苓。 沈香 志らしや此六味
を能く丸しくて金箔を衣に細薬茶の
子のハ日ゟよりえさ鷹小鯛に鷹ほとくるる
鷹ハよきまかくてしらさくて拵よきあり
鷹もありしかあんおふくてしいかなる
病をも当中の座ハ物さゝの日のゐ好文・
くそ拵て鷹ならのあるかを鯛風の日なを・
おかれきよしさいりくし薬茶をは鷹の命
とけます
七十五
鷹肉かしき鵜虫に事給を乳汁おあ
つしあこうる鯛へしてそあうしもたを行

要ともなる

六十 蒼ふかしこごしのめしてのもかしてもれば
りしかんせず 硫黄と中と出しうしてうち
入てかしこ沸る式あるきて中計かしも又も
なるかしもこの中焼式ぶこうる中と白茶
のうかしこ沸かとうこさてて解ふる角
七十 反地の才法の事本るこ天あすこうるさも
月ふるし但あけの地に戻しこ天式す
あけのとうふ大蒼のこと中の蒼八
蒼とかまへ沸るかしきてんぶてもるかう
八十 蒼ふかふるの事 さうのこらしこうる

角山のふへいつゆ流てて海しあ
るかうこ蒼ふせんそのすふしあうこさて
こ云四ふぶの水こ こうぶかのかこ云
いるまけとふしとうあてこうふるのせい
ちゆうこ百日沸てこうあけてぶふ
ちゆうこ日沸て別てこうぶはこうの
こうるあるふこ式こあつめし蒼む
ふしこうる打ふ解ふるいこけ角
こうのかこふ板のふこ海する水こ
蒼る蒼ふすかるこ十二角あこと云
こうて沸ふこ式ふこ蒼ふこ水と沸ん

七十九

話を度々事合茶 人を火葬する後
の通りなる所とあるふ所ふ式日ふ合
ちう合ちうふ色ふ入くくの木くしやく燒
日数とい火を消さたしてあ十日中ふ出る下い
十あ日式日ふ日数燒る後ちうちる
晴い日ふ一日ちうちう六日かい日かい日ふ出る
七るふ夜間ふこの話ゆしふ高ちてはうを式
ちやうふの話ふいふくしちうをかいふ物う
湯をちうくふ方し相角ふ出話をかいし
湯式をもむるふちうちうちる血をちう
をちうふ

八十

ふくゆくふ書を初ちあつかりて四を你
しつ拵ふくちをいくちを命ふ

一八十

あさゆくふ書を初ちあつ事をちうかりて當夜
自由拵ふるちをいくちを書ふ拵ふかくちを

二八十

をちうくゆくふ出ふちうをいくちを
書ふちうを相ふ四をちうかくふ四をちうふくこ近
ちうあい度くくちを毛ふかくふを度くちを
ちうちうくくちう

三八十

かくこちんまいくちを茶ふの事庭子の死をるか
ふ度を古湯ゆくをるふちうをのめふか
ちうを荒書大書ふ度ふ事かちを口ふ元書ふ事

四 八十

かゝる成り年ごとの此茶の湯者のことをふ
ふらかゝらの方ごとに成人の口をもと
いふ根ばのかつけ茶こよりしの茶と号又
あつ茶大ゆつ

たゝとり者ゝつ座ゝ事する中一向ゝ
ぞくゝとゝゝ成てゝ者ゝ稼ゝ成ゝ
いうやゝわゝゝいゝ花瓶を用ゝてゝ
ゝは取ゝおゝあゝゝ用ゝゝ行ゝ
紙のかゝゝ者のゝ元ゝ日ゝかけゝ
八月紙のゝゝ小ゝ日ゝ記ゝゝ又ゝかゝめゝ
紙ゝおゝゝ瓶ゝ用ゝゝゝゝ

五 八十

らゝ伝のかゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ者の事ゝゝゝゝ
ゝゝ座ゝ四あゝゝ座ゝ
ゝゝゝ者ふゝゝゝゝ
ゝゝゝ成ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

六 八十

者小者瓶を用ゝゝゝ者ゝ
おゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ者ゝゝゝゝ瓶ゝゝゝ

八十七

蕎麥のこまかに成て骨髓を絞ふくし骨髓
髓に新粉の粉の首骨をさしこまし固こ髓に
入て二七日程置骨髓髓ゑいこさこ
蕎麥の中をうつて茶を髓のあつさ中赤
中に固おくし黑中に蕎麥をふるうてさ
中赤中赤を黑中にかくして茶こぐかに
して髓ゑせんこ又黑中に髓ゑ茶の麥
赤中白中がくし茶にてあつくて茶
赤中茶赤つゑふくも此蕎麥の
蕎麥にこ茶の事 黑中 都の色 麥の
名の法に極多きこゑ黑をとこれ麥

八十八

小ゑ蕎麥あつ麥を沸て髓を引
麥にて髓を引てゑ麥小ゑあつ一に極うこ
麥 髓にかさたる麥 此ふこ髓ふ茶の
いのこつの根かけてこ彩こ指茶こ髓
ふくかをし髓ふくこのあぶくを引こ
させこてかくのふんかく茶中茶ふく
に髓こかこ髓をかくかたこ
沖縄の麥こ指こ麥やいこの沖
縄の指麥こ指こ麥やいこの沖
縄の指麥こ指こ麥やいこの沖

八十九

ときは鴨をさして鳥とゝある論ニ或ハ白
けるの稀ハ者ハ答ヘ大鷹ハ鳥をたか
もちやもし是は必鷹を指て
かしをと鷹と独孫ハ遠きと近きとの
替りめいつもおほしくハあるなり
鷹ニ指ものおほし是鷹ハ必鳥あるまじき
九十一 兄鷹相ふ所さ事すし子さんと云ふ文
すし子ハ二やしさん和ミ此のうちの所を
もしの早引通して鷹の事をつかふあ
あくまて子をぬきさて合所一ニ様の住を
まこと是されはなきあり

九十二 七種の深味の深味一ニハの言の孫二ゝ赤
ぎしの根ニくの木の名の名是にみ孫をの
葉あきその木の葉六ゝをまし木七ニ柚の
木の葉是或ハうるみまこうしてせく丹後ニ
百しかひく稲わほくてまたこう系ましゝて
たいてきちあつ者を方をよすこうて
わしまるめく鷹ニかくし
九十三 鷹鶉佐之所さ事としのこぢる中ニて
のいさる内ハ第一亀めしかいとしのへて足結を
さし大うハるみ心あしてきつう小指て凡
鷹を何ぞいと教ん様凡当指そこはこ

ゐるものもむまきゝ口脇を持てさし出せ
まるゝを投あるゝ拳あるゝを時ふるく
と用ゝ又後い乃出前いかゝ口脇をゐけ
却てゝせ又口脇ゆかゝあるあるあるあるゆえ
口ゝゝ馬のゝてゝ
うるゝ米はおゝゝかゝゝ又高ゆへ
くざいゝあまゝの指身地どゝているを
ゝゝゝゝゝゝ就とせゝまてゝたゝゝゝお
ゆひてゝるのゝの拳ゝあげるゝたゝのおを
ゝかゝゝ又るゝゝゝゝてもゝ就ゝあゝゝ
ゝ高のゝゝゝけゝゝもるゝを始かゝゝ

拳ゝ米ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝるゝゝゝ芸花をむをゝゝあけゝ穴をかれゝゝ舟
高ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝをゝゝゝゝゝ拳ゝゝゝゝを汐ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
さゝゝゝゝ馬ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ拳ゝ米ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
高ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おもて京子おちてまいりもあるを見て見え
まいり薬は見らず世云莚ともりなりて文てや
むの病ともあり其くらいけをせくとし
い服ぶし　得て服おちもさと以ても云ふきさこ
こ用いて是もし　いしんれ世云莚薬い必
日二一服ありあくびもするく其くも薬の服ね
いらぬもの回てるりよほるかしなくいうて
涼しき所に寝るいかるも床かけあり
ておもくなるおいいをもち回りけてもあるを服ねれ



鶏の卵黄を入る様出目暁て粘ゑして
能目解をよくつこめ細くゐつけ採用ゐし

解用ゐてもやとくかいり用大法なしと夜
火に以ぬり粘てかあふるをぞ其ふよりもら
あるとうに其るる薬をまそ
服にれ一服に粉以沖する取得て屏解
小かしをとなへもよろしかつて初は遠く
より後にむてわけても左て少せよ分し
其倍薬あるし此分をかくもとしよる薬通
しゆくある沖立つる粉あし薬は法や
小二服に二服七服に而一つれ但年は倍
服もおくとし年のりくいてを知る事つらい
薬もも油引して自然めるをあるもにて之

ゆく傳りて遠くりもさころまに方るるか
し年ハいかゞ此所につゞいてきたれり梅に
九十五 當流の底清の大の事昔は十ヶ寺にも由旧
は五一流く鶏形底にあり鶏ハ二つの
すら形をこと大臣の業己方ふりを
して其鶏形底にも里ぶりハあらん
きかしいふもしも後形の長を?
未世とハ成ね悦き無我此事持を轉あ
のらく方な底をこきをさきとハ此さ
とくの法ぞあるへしと見る大鶏の次沖か
くのごとし

九十六 鶏の根本絹袋と云事有り絹袋とハ
のかうまさし板をしり?ヶ十二分にて鶏
をけ入る袋の支ハりさかくへきぐらん
又外は絹ゆくもさて一袋はあゆきさふ
かいくぬしくてまもをよそハけ海い
あとも?おさゆるいまるハ日のさう小絹
なもこころさゆふふつ?しく鶏を竭つめむとを
まかつてハけふし?ほよハれ自治として
神く是成る事あしてさて其鶏の樂
をまはれこそめをハけり支法やへとれ
九十七 鶏のあけ本志つゝ底さま支のゆきみちく?

をとらすみ小の小仕くめしかひめしかかさ
をとらこのちくしにさまりて鳥を
とらするこのうさを承出しうつのたまよ
見さかけし馬のうへて鷹犬拳へ見さあ
らるあけ本の方目出ゐいふかはもを称る
のとあおかたくまゐるかしかきて本ゝ流
すはいさてまし九て人しをこ尺四寸に
まうへしうし小白馬のかしらめしもす寸
水にまくいを緒て見て鳥賦に乃合
是又羽鷹本ふしよもまで左て本鷹の
時かうりて馬のうへしらへか乃をとるの見よあ



九の方之あかきをつよく婦なて鷹の羽
をセるかもつてしくわかみ鷹羽もむさけ
馬のうへより乃かくさ山ふ之文まる分とよ
て自にれ本いせる肉るをとつらけれい
くいはふかりて沖餌分しして拳を
分つ様事なく
鵜招心本く試に乃当るをとりしてさるを仕
ふ様いうかもよき餌を餌にてし小仕す
入此餌を口あ皮餌にて後肉を振つて
目尾をそ一寿かりけしおかしく鵜を餌にて
しかようをてし　此外の餌のてとくよせいつて

九十九

百

百一

[illegible]
[illegible]
[illegible]

織をのこつるあり毒虫を療治とい
へり[illegible]かつ毒にてまづ血を出すべし
[illegible]
[illegible]

皇象を治する事 皇象い胡象ホもえん
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ちとこれ四ものの分けしかくのこと
法病の分量をさとる事圖ニ示る樣
心のうさ量い心の面に向ひて心の
うさ量い心の面の分量よりて
拍ちこれ位二度二度の支いうるしかくて
又こ分量をおくひてこれ向ひ意義
こ分い此こうをうこと病い何ものて
あるうを名り事しうるかい出せ
行べし

面眼をふさぐあふのけいかめて拍病
あり此病い樣をこいてかのこうに藥



こある藥の事 度柳を藥ニ眼に洗
ふさぐ眼のさうをを目度柳をこ丁藥をつ
事しかこ知るを度ニ目の藥を拍あて
眼ニ目玉無のさういをこ出てうあこ拍る
けうこふ病い事つ度くこ可てこうをた
くこ拍ニよこ小かる茶の事い 白茯苓
の事の目ニうをる藥 道の根を藥して角く
氏病ニ何のかしあ多のあらふをかこを出
の事こた
出ものをこふる意ニ拍ニ小くくこてつけ
いこをこくこの藥こ只あつかいまして出ス

と云へども茶の支
為とこまかにさゝてを茶を一度ごと
て蒸し此湯かしの鉢をあらかじ
らためをたゝ伽羅ゆしもはるいろい
くさと云へども茶けを又煮る
此前ぶ鉢の分事二段あり一に初番二
口をけと云病にかゝりた鉢にてて
呑かあるを所の此二説のうちて以前茶
ふし

中風煮の支煮の肉ようぶと云へども度
たに取て別へていかり物ようにし



ぶ物にあふのようふ高ようと大ゝと明けた
ゝを口ゝ中風ゝ沸て茶の支
かゝ茶　茶のめ　こまめを搗茶に鉢
の支いを弱を形無ゝた此鉢と高ようと
ゝを用ゝ鉢の事いふ及中をめるるを
焼てゝ煮るとゝる日茶の味を蒸して
此湯とうのゝ入ゝてゝ此息ゆし搗の
口ゝゝ元を日二度を元をるもゝ元
の度　かけ　茶の茶　ゝ茶の味　ゝ茶
おゝこ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝ紅へおかる
ゝて　茶ゝ　ゝもるゝ茶ゝのゝた

但茶を用ひたるくすりは毒にかゝる
茶の第一と云い水弱橋果し
中毒すると云ふ病又は酒を
肉色紙又ゆるしいろ〳〵を
て平生よりいづれ解をとりふとくもせん
くぶ屈せて死もるくしるもの油のい
さるを大事なるは大豆は指茶に
解毒用ひ式書生のるあい解毒法
有説也指の深茶を陽にして七日煎
いろ〳〵効ある法師に設もそ〳〵成よるか
おのづから指の深茶の三巻に設ける



年二度つふ度さ次第三巻に設ける
毒かる病を治する丸薬あり此指
て和うう無の下〳〵こゆ骨ろ足ゆまし
毒を吸おとまつ高をとうさそうあし
うた茶の事　ちん〳〵のあか孫丁子　硫黄
黄柏黄式河の渇ゆしこ〳〵黄〳〵高をふ
ヒて日に二度ひ洗つ〳〵茶の丸
吸高こする毒を馬焼こあるさしこあ
ゆ通し解をのあ〳〵てふ〳〵ゆしも用ら
茶少は〳〵引をとさ〳〵て出茶の石に日に
一包ひ〳〵用式包藤いうゆるゆ〳〵ゆ藤包

吸ひ付けて白ひふ〳〵吸うぬるこかし湯
の支持病どうさふ
かくてやまだたこら血を取こ

百十四 百十三八ぢやまこせン

屠蘇おなじ　しこ草の事　ふうせ薬
の馬焼　ふしかしたの次の馬焼ぞ成ぬこ
あこせあハりなとこちく沒加へて屠こ
沙りくのこうこう血を出　中度大成こ及
ぶこ必ずも蘇の皮を剥て耳かさこ沙ぬを
くいて薬小ぬこのどこうこまこさこへこふ
四の水を入て三ぬこる息出ちを出ら
を沙りいこ必ずこまだして中度ぬ

百十五

こう屠蘇の用ひこうこ思ふ数
蘇の毛の数の支八百四千九百九毛こ此
毛を法不さつの形を取ぬこ
こ沙こうこふ沙地を法ぬこ

百十六

蘇の毛ぬつこうぬ茶　茯苓こ
かんるこ人ちく　蘭の花の形
まこたく来こ形　くこく
石のうこうこ
薬を薬して
薬ぬませかこ

此書物根法一流之秘傳依
南狐心今相傳者也